

TPP関連Q&A集作成

キャラバン説明会踏まえて

農水省

農水省は2月16日、農政新時代キャラバン説明会の質疑応答を整理し、Q&A集としてホームページに掲載した。同キャラバンは、農林水産分野のTPP対策などを生産者・関係者に丁寧に説明するため、各ブロック・都道府県で開催。Q&A集は、TPPの影響や対策に関する(総論編)と、品目別の体質強化策などの(各論編)の二部構成で、キャラバンでの81の質問・回答を取り上げて紹介する(一部割愛)。

後には何らかの協議を行う場合であっても、このような経緯、バランスを十分踏まえ、しっかりと対応していきます。

Q 食の安全・安心が脅かされませんか

1 TPP協定により、残留農薬・食品添加物の基準、遺伝子組換え食品等の安全性審査や表示を含め、日本の食の安全・安心に関する制度変更が行われません。

2 我が国の食の安全に関するルールは、既に締結しているWTO協定(世界貿易機関設立協定)の中のSPS協定(衛生と植物防疫のための措置)を踏まえ、科学的根拠に基づいたものであり、TPP協定において更に行われません。

3 畜産・酪農収益力強化総合プロジェクトの推進等の対策を講ずることです。

厚労省は2月2日にノルウェーおよびデンマーク産の、26日にスウェーデン産の牛肉・内臓肉の輸入をそれぞれ同日付で再開すると発表

01年2月より、ノルウェーは昨年1月より輸入手続きを停止していたが、昨年初め、食品安全委員会の輸入をそれぞれ同日付で再開すると発表

1は昨年1月より輸入手続きを停止していたが、昨年初め、食品安全委員会の輸入をそれぞれ同日付で再開すると発表

条件は、①月齢制限は、30カ月齢以下②SRM(特定危険部位)の範囲は、月齢制限を前提に扁桃および回腸遠位部とする。この条件は、これまでに輸入を再開した米国、カナダ、オランダ、フランス、アイルランド、ポーランドと同様。

3月 九州開拓連絡協議会(福岡)

全国開拓振興協会

全日本開拓者連盟

ブロック会議(福岡会場)

24日 千葉酪農協通常総会

15日 栃木県開拓農協通常総会

18日 蕨酪農協通常総会

全日本開拓者連盟

全国開拓振興協会

監事監査・監事会

19日 全開連定期監査(西日本支所、ゼンカイミート)

富士開拓の松下氏発表

セミナーで酪農の魅力語る

関東農政局と(公社)中央畜産会は2月7日、さいたま市で「酪(乳)農のすすめ!酪農に興味がある方向けのセミナー」を開催した。



就農等による生産基盤の維持・発展を図るのが狙い。都県や関係団体、生産者のほか、酪農に興味がある学生らが参加し

現在従事者は4人で、飼養頭数は経産牛1000頭、育成牛40頭。昨年4月には、目標としていた60頭搾乳ロボット牛舎を稼働させた。牧場では毎年、関東、静岡県の小・中学校を中心に児童・生徒の酪農体験を受け入れている。

また、金融機関勤務の経験から、PDCAサイクル(計画-実行-評価-改善)を酪農経営においても意識し、実践していることを紹介した。

松下氏は「酪農は、自分の努力次第で多くの可能性を秘めた職業」と、その魅力を語り、「これからの酪農が厳しい環境に置かれても、業界全体が頑張れば明るい未来が待っているはず」と結んだ。

厚労省は2月2日にノルウェーおよびデンマーク産の、26日にスウェーデン産の牛肉・内臓肉の輸入をそれぞれ同日付で再開すると発表

01年2月より、ノルウェーは昨年1月より輸入手続きを停止していたが、昨年初め、食品安全委員会の輸入をそれぞれ同日付で再開すると発表

条件は、①月齢制限は、30カ月齢以下②SRM(特定危険部位)の範囲は、月齢制限を前提に扁桃および回腸遠位部とする。この条件は、これまでに輸入を再開した米国、カナダ、オランダ、フランス、アイルランド、ポーランドと同様。

3月 九州開拓連絡協議会(福岡)

全国開拓振興協会

全日本開拓者連盟

ブロック会議(福岡会場)

24日 千葉酪農協通常総会

15日 栃木県開拓農協通常総会

18日 蕨酪農協通常総会

全日本開拓者連盟

全国開拓振興協会

監事監査・監事会

19日 全開連定期監査(西日本支所、ゼンカイミート)

入面積69cm、バラ厚8.9cm、BMS No.7、種雄牛「北乃大福」が受賞した。出品牛全体では、平均25.7カ月齢、平均枝肉重量558.9kg、肉質3等級以上比率69.2割だった。

肥後開拓農協は2月17日、熊本県錦町のゼンカイミート(株)で15年度枝肉共進会を開催した。

交雑種去勢牛13頭が出品され、最優秀賞は、荒木敏雄氏の出品牛(26.9カ月齢、枝肉重量576.2kg、B4、ロー

開拓ながさき農協は2月25日、ゼンカイミート(株)で第6回開拓ながさき畜産共進会を開催した。開拓牛部門に8頭、開拓交雑牛部門に25頭が出品され、開拓牛は、福田武氏の出品牛(21.4カ月齢、枝肉重量504.4kg、B2)、開拓交雑牛は、坂口淳氏の出品牛(去勢、25.6カ月齢、肉質3等級以上比率80.0割だった。

就農等による生産基盤の維持・発展を図るのが狙い。都県や関係団体、生産者のほか、酪農に興味がある学生らが参加し

現在従事者は4人で、飼養頭数は経産牛1000頭、育成牛40頭。昨年4月には、目標としていた60頭搾乳ロボット牛舎を稼働させた。牧場では毎年、関東、静岡県の小・中学校を中心に児童・生徒の酪農体験を受け入れている。

また、金融機関勤務の経験から、PDCAサイクル(計画-実行-評価-改善)を酪農経営においても意識し、実践していることを紹介した。

松下氏は「酪農は、自分の努力次第で多くの可能性を秘めた職業」と、その魅力を語り、「これからの酪農が厳しい環境に置かれても、業界全体が頑張れば明るい未来が待っているはず」と結んだ。

厚労省は2月2日にノルウェーおよびデンマーク産の、26日にスウェーデン産の牛肉・内臓肉の輸入をそれぞれ同日付で再開すると発表

01年2月より、ノルウェーは昨年1月より輸入手続きを停止していたが、昨年初め、食品安全委員会の輸入をそれぞれ同日付で再開すると発表

条件は、①月齢制限は、30カ月齢以下②SRM(特定危険部位)の範囲は、月齢制限を前提に扁桃および回腸遠位部とする。この条件は、これまでに輸入を再開した米国、カナダ、オランダ、フランス、アイルランド、ポーランドと同様。

3月 九州開拓連絡協議会(福岡)

全国開拓振興協会

全日本開拓者連盟

ブロック会議(福岡会場)

24日 千葉酪農協通常総会

15日 栃木県開拓農協通常総会

18日 蕨酪農協通常総会

全日本開拓者連盟

全国開拓振興協会

監事監査・監事会

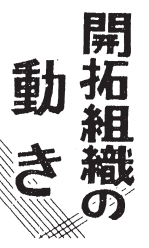
19日 全開連定期監査(西日本支所、ゼンカイミート)

入面積69cm、バラ厚8.9cm、BMS No.7、種雄牛「北乃大福」が受賞した。出品牛全体では、平均25.7カ月齢、平均枝肉重量558.9kg、肉質3等級以上比率69.2割だった。

肥後開拓農協は2月17日、熊本県錦町のゼンカイミート(株)で15年度枝肉共進会を開催した。

交雑種去勢牛13頭が出品され、最優秀賞は、荒木敏雄氏の出品牛(26.9カ月齢、枝肉重量576.2kg、B4、ロー

開拓ながさき農協は2月25日、ゼンカイミート(株)で第6回開拓ながさき畜産共進会を開催した。開拓牛部門に8頭、開拓交雑牛部門に25頭が出品され、開拓牛は、福田武氏の出品牛(21.4カ月齢、枝肉重量504.4kg、B2)、開拓交雑牛は、坂口淳氏の出品牛(去勢、25.6カ月齢、肉質3等級以上比率80.0割だった。



開拓組織の動き

農研機構東北農業研究センター

トラクタ 浅層暗渠施工器マニュアル作成

シンプルな構造で製作費安

近年、水田を畑として麦、大豆や野菜などを栽培するところが増えてきているが、水田の排水機能が不十分な場合は品質低下や減収となる。多くの農家は水田に本暗渠(地下管水路)を施工しているが、その施工や改修は大がかりであり、農家自身が機械を使って手軽に施工する手段はほとんどなかった。

農研機構東北農業研究センターは、排水が不十分な水田や水田転換畑で、農家が所有するトラクタを使用して、簡便に暗渠施工ができる「浅層暗渠施工器」を開発し、同施工器を製作するためのマニュアルを作成した。

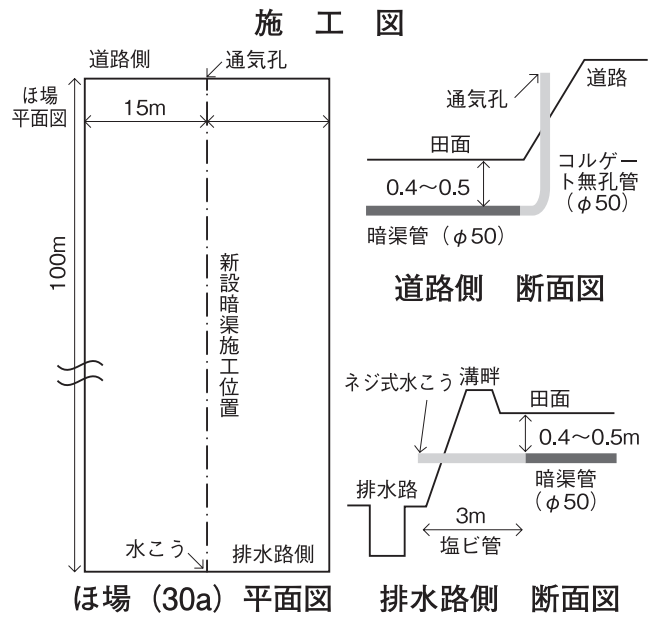
浅層暗渠施工器の特徴は、①農家所有のトラクタ(85ps以上のセミクローラ型)により施工できる②農家の営農作業において、水田の掘削から暗渠管の敷設、疎水材(もみ殻)投入までを

一連作業として実施できる③同施工器本体はシンプルな構造であり、地域の鉄工所などで安価(80万円程度)で製作できる④小規模区画の水田でも手軽に施工できる。

必要な資材は、①暗渠吸水管:コルゲート有孔管φ50mm(管の表面に1mm程度の幅のスリット入り。φ50mmでは1巻100mで市販されている)②ネジ式水こう又は水平水こう③通気孔部・水こう取り付け部:コルゲート無孔管又は塩ビ管およびエルボ④継ぎ手類:コルゲート・塩ビソケット、

コルゲート管ソケット等⑤もみ殻(疎水材):25~30体/100m(市販のもみ殻用ポリ袋)。

暗渠の施工は、①小型バックホーで暗渠上下流端(水こう部、通気孔部)を掘削する②暗渠施工位置を弾丸暗渠などで破碎し、同施工器にかかる牽引抵抗を低減させる。水こう(排水口)部分は塩ビ管又はコルゲート無孔管を設置する③暗渠管敷設後の修正ができないので、同施工器による開削のみを行い、暗渠管が埋設される深さを事前に確認



する④暗渠管の敷設と疎水材の投入を行う。この手法では暗渠管は水平に敷設される⑤水こう部、通気孔部を埋め戻す。水こう部は水漏れによって畦畔が崩れる恐れがあるので、十分に締め固めて埋め戻す⑥掘削した位置をトラクタで踏圧する。

同マニュアルが必要な場合は、同センター情報広報課に問い合わせを。同センターのホームページからもダウンロードできる。

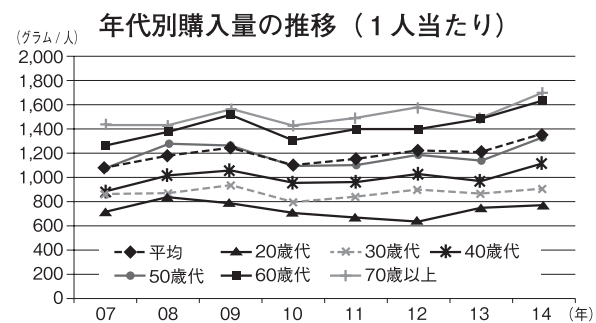
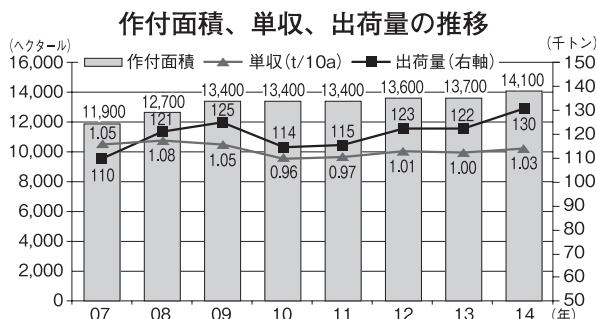
農家所有トラクタで施工可能 水田転換畑などにも対応

ブロッコリー出荷量増加傾向 年間購入量07年以降過去最高

農畜産業振興機構はこのほど、「ブロッコリーの需給動向等について」を公表した。それによると、14年の作付面積、出荷量、単収すべてで増加傾向にあり、1人当たり年間購入量は07年以降過去最高を記録した。

14年のブロッコリーの作付面積は1万4100ha、出荷量は13万400t、単収は10a当たり1.03tとなった。作付面積、出荷量、単収を07年と14年で比べると、作付面積が118%、出荷量が119%の増加率となっている一方、単収は微減しており、出荷量の増加は作付面積の増加が大きく影響している。

都道府県別にみると、北海道が2万1700tでもっとも多く、次いで埼玉が1万3800t、愛知が1万3300tとなっており、この3県で全国の約4割を占めている。香川では07年と比べると、作付面積が173%、出荷量が159%、長崎では作付面積が165%、出荷量が160%と著しい増加を示している。東京も出荷量が1750tと15位の茨城に続いてお



り、都市農業の重要な作物となっていることがうかがえる。

総務省の「家計調査報告」によると、1人当たりのブロッコリーの年間購入量(冷蔵含む)は、健康志向から近年は増加傾向で推移し、14年は1371gとなっており、07年以降過去最高の量を記録した。

年代別にみると、20歳代で購入量が多くなっており、全体として年齢が高くなるほど購入量が多くなる傾向にあった。

モモ収穫・出荷量ともに1割減 スモモ同様に減少傾向

農水省が公表した「15年産モモ、スモモの結果樹面積、収穫量及び出荷量」によると、モモの収穫量・出荷量ともに前年産に比べ1割減少した。スモモも減少が続いている。

モモの結果樹面積は9690haで、前年産に比べ160ha(2%)減少。収穫量は12万1900t、出荷量は11万1400tで、前年産に比べそれぞれ1万5100t(11%)、1万4000t(11%)減少した。10a当たり収量は1260kgで、開花期の天候不順の影響により着果数が減少したこと、生育期の高温・多雨の影響により裂果及び落果等により、前年産に比べ130kg(9%)下回った。

都道府県別の収穫量割合は、山梨が32%、福島が22%、長野が13%となっており、この3県で全国の約7割を占めている。

スモモの結果樹面積は2880haで、前年産に比べ20ha(1%)減少。収穫量は2万1300t、出荷量は1万8600tで、前年産に比べそれぞれ1000t(4%)、1000t(5%)減少した。10a当たり収量は740kgで、前年産に比べ29kg(4%)下回った。

都道府県別の収穫量割合は、山梨が32%、長野が15%、和歌山が11%となっており、この3県で全国の約6割を占めている。

春植えばれいしょ収穫量減少続く 主産地の北海道でも同様の動き

農水省がこのほど公表した「15年産春植えばれいしょの作付面積、収穫量及び出荷量」によると、全国の作付面積、収穫量、出荷量すべてが前年産に比べ減少した。

全国の作付面積は7万4600haで、前年産に比べ90ha(1%)減少。10a当たり収量は3160kgで、前年産に比べ30kg(1%)減少した。収穫量は235万4000t、出荷量は196万6000tで、前年産に比べそれぞれ5万5000t(2%)、5

万3000t(3%)減少した。

全国の収穫量の約8割を占めている北海道の作付面積は5万1000haで、前年産に比べ500ha(1%)減少。10a当たり収量は3720kgで、前年産並みとなった。収穫量は189万7000t、出荷量は169万tで、前年産に比べそれぞれ1万9000t(1%)、2万5000t(1%)減少した。

北海道以外で収穫量が多いのは、長崎(全国の3%)、鹿児島など(同)。

新潟県農業総合研究所畜産研究センター

泌乳前期 稲WCS主体TMR給与 玄米最大30%混合でコスト削減

新潟県農業総合研究所畜産研究センターは、これまで行った試験で、稲WCSを粗飼料の主体とするTMRを用いて、泌乳前期の乳牛には25%まで給与可能なこと、泌乳中後期の乳牛には35%まで給与が可能であることを確認している。

同センターは、泌乳前期のさらなる給与可能な飼料用米の混合割合を明らかにするため、再度試験を実施した。

試験は、乳用初産牛6頭を供試し、飼料用米を破砕機でローラーの間隙を1mm程度に調整し、破砕処理した玄米を乾物で25%混合の発酵TMRを給与する「25%区」、30%混合の「30%区」の2区(各3頭)を設けた。主な粗飼料として両区とも稲WCSを乾物で25%混合し、ほかの飼料の混合割合は、

ほぼ同様とした(表1)。

分娩予定の2週間より馴致を開始し、分娩後10週目までの飼養試験を実施した。

試験の結果、乾物摂取量、乳量は各週次および10週間の平均値は2区に有意差はなかった(表2、図)。乳成分率は、乳脂率、乳たん白質率、SNF率(無脂固形分率)ともに有意差はなく、飼料用米の混合割合を高めても乳生産に影響はなかった。

第一胃内の総VFA(揮発性脂肪酸)濃度は、「30%区」で高い傾向だったが、酢酸プロピオン酸比に差はなかった。血しょう中の諸成分濃度は、2区に差はなかった。

以上の結果から、破砕済み玄米を乾物で30%混合した稲WCS主体の発酵

表1 飼料の乾物混合割合および飼料成分

飼料・項目名	飼料用米混合割合	
	25%	30%
乾物混合割合(%)		
稲WCS	25	25
イネ科牧草	10	10
飼料用玄米(破砕済み)	25	30
ビール粕	10	9
豆腐粕	10	9
ビートパルプ	6	3
大豆粕	10	11
その他 ¹⁾	4	3
成分含量(乾物中%) ²⁾		
粗たん白質(CP)	16.7	16.7
中性デタージェント繊維(aNDFom)	33.6	30.4
粗脂肪(EE)	4.7	4.1
非繊維性炭水化物(NFC)	34.3	39.1
可消化養分総量(TDN)	73.9	75.2

¹⁾フスマ、糖蜜、ビタミン、ミネラルを含む
²⁾設計値

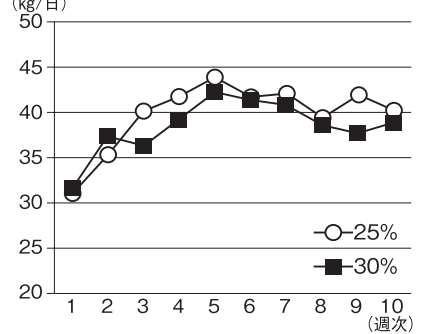
TMRは、泌乳前期の乳生産に大きな影響なく利用できると考えられた。

利用上の留意点として、①玄米の破砕粒度が細くなると、第一胃内が酸性化する場合もあるため、飼料全体のデンプンをはじめとする非繊維性炭水化物と繊維等の諸成分含量のバランスをとり、乳牛の反応を見極めながら給与する②玄米の混合割合は、牛の状態を注意深く観察しながら、しだいに増やす。

表2 分娩後10週間の乳生産

飼料・項目名	飼料用米混合割合	
	25%	30%
頭数	3	3
乾物摂取量(kg/日)	22.0	21.0
乳量(kg/日)	39.8	38.3
乳成分率		
乳脂率(%)	4.59	4.45
乳たん白質率(%)	2.96	3.01
無脂固形分率(%)	8.44	8.60

図 分娩後の乳量の推移



同センターによると、玄米を8kg(混合割合30%相当)給与することにより、配合飼料全量給与に比べ、搾乳牛1頭当たりの年間飼料コスト(配合飼料65円/kg、飼料用玄米30円/kgで試算)は、約10万円の低減が期待できるとしている。

長野県畜産試験場

肥育後期豚 規格外小麦2割給与 肉質影響なく増体量維持

養豚は飼料原料の多くを輸入穀物に依存しているため、飼料用米やエコフィードなどの国産原料を活用したコスト低減が重要である。

長野県畜産試験場は、小麦生産で排出される規格外小麦の飼料としての利用性と肉質向上効果を調査した。

試験は、LWD雌14頭を供試豚として、市販配合飼料を給与する「対照区」(5頭)、配合飼料の20%を粉砕した規格外小麦で代替する「試験区」(5頭)、配合飼料の20%を粉砕した飼料用玄米で代替する「飼料用米区」(4頭)の3区を設けて試験を実施した(表1)。各区とも群飼で飼料は不断給餌とした。

体重約70kgから試験を開始し、115kgを越えた個体からと畜を実施した。規格外小麦は、麦収穫後2.2mmのふるいを通過したものを飼料用粉砕機で外皮が割れる程度に粉砕したものとした。

調査項目は、発育および飼料要求率、

平均枝肉重量、肉質成績、背脂肪内層の脂肪酸組成と脂肪融点とした。

試験の結果、日増体量は、各区とも1000g以上だった。飼料要求率は、「試験区」がほかの2区に比べて、良好だった(表2)。

平均枝肉重量は、「対照区」および「試験区」は77.7kgで、「飼料用米区」は77.5kgだった。

背脂肪の厚さは、平均値では各区とも枝肉取引規格の「上」の範囲内だったが、「試験区」と「飼料用米区」の各1頭は2.5cmとやや厚く「中」となった。歩留りおよびロース断面積は各区に差がなかった。

肉色は、「飼料用米区」の明度が、ほかの2区よりやや高かった。脂肪色は、「試験区」が、ほかの2区に比べ明度が高く、赤色度が低かった。筋肉内脂肪割合は、「飼料用米区」が、ほかの2区に比べやや多かった。

背脂肪内層の脂肪酸組成では、リノール酸は、「試験区」および「飼料用米区」が「対照区」より少なく、オレイン酸は「飼料用米区」がほかの2区より多かった。脂肪融点は、「試験区」が43.1℃でもっとも高く、ほかの2区も融点は高かつ

表2 発育、飼料要求率および枝肉成績

	日増体重(g)	飼料要求率	試算による飼料必要量(kg)*1	歩留り(%)	背脂肪の厚さ(cm)	ロース断面積(cm ²)
試験区	1180	3.03	136	68.3	2.2	20.8
対照区	1104	3.27	147	67.8	2.1	21.0
飼料用米区	1071	3.15	142	68.0	2.3	20.5

*1: 体重70kgから115kgまでの45kgの増体に必要な飼料量を要求率から試算
背脂肪の厚さにおける豚枝肉取引規格「上」の範囲: 1.3~2.4cm
ロース断面積: 第4-5胸椎間

前期・後期のエサ分けが重要

乾乳期の対応および注意点

乳牛に発生する疾病の多くは、分娩前後に発生することが多く、乾乳期の管理方法しだいで次期乳期の生産性アップにも繋がるため重要である。乾乳期の対応および注意点について、北海道根室農業改良普及センターの「乳牛の飼養管理」から紹介する。

乾乳時の注意点

①乳房炎治療の確認後、乾乳軟膏を注入する②搾乳刺激から遠ざける(ミルクカーの音などで漏乳のリスクが高まる)③乳房の張りは3日目頃にピークになり、4~5日後に、乳頭表面にしわが増え、乳房がしばんでくる。異常があれば治療し、再度、乾乳作業を行う④乾乳直後は乳房炎になりやすい時期のため、清潔な場所で飼養する⑤可能であれば、乾乳後2週間、1日2回のディッピング

を行う。
乾物摂取量を低下させない管理
①質の良い粗飼料の不断給餌を行う
②過密にしない③育成牛群の中に乾乳牛を入れない④衛生的で乾燥した環境とする。

栄養充足とカルシウムコントロール
乾乳後期(分娩3週間前)では、胎児の急成長による第一胃の圧迫から採食量が減少するものの、胎児の成長および泌乳に向けた栄養要求量が高まる時期のため、十分な乾物摂取量とともに、栄養を充足させることが欠かせない。

また、泌乳開始時の低カルシウム血症を防ぐためには、カルシウム給与を制限する。

管理上の注意点として、乾乳前期牛と後期牛とは同居させず、エサを明確に分けることが重要である。

表1 給与飼料の成分

	水分	粗たん白	粗脂肪	NFE	粗繊維	粗灰分	TDN推定値
市販飼料	12.5	13.6	3.5	62.3	3.8	4.3	76.5以上*1
分析値							
規格外小麦	13.4	9.8	1.6	70.1	2.5	2.6	77.1*2
飼料用米	14.6	7.4	2.3	71.7	1.1	2.8	80.3*2
飼料成分表							
小麦	11.5	12.1	1.8	70.5	2.4	1.7	79.8
玄米	14.8	7.5	2.7	72.9	0.7	1.4	82.0
給与飼料の成分(計算上の成分)							
対照区	12.5	13.6	3.5	62.3	3.8	4.3	76.5以上
試験区	12.7	12.8	3.1	63.8	3.5	4.0	76.6以上
飼料用米区	12.9	12.3	3.3	64.2	3.3	4.0	77.3以上

*1: 飼料表示票による
*2: 飼料成分表の小麦および玄米の消化率から求めた推定値
可消化たん白+2.25×可消化粗脂肪+可消化NFE+可消化粗繊維

農場拝見

福岡県宮若市 小金原開拓 森下團藏・哲次さん



福岡県北部の宮若市小金原開拓地は、旧産炭地である筑豊地区に位置し、周囲を標高300~600mの山に囲まれた盆地の中にある農山村地域。

同開拓地には、1948(昭和23)年に16戸が入植した。離農が進み、現在、森下團藏・哲次さん兄弟が唯一、農業経営を営む。

初代の團藏さん(故人)が、芋の栽培などに取り組み、55年に乳牛の導入を始めた。同年には、二代目の健二さん(故人)が炭鉱に勤務した後、30歳の時に就農した。

三代目の團藏さんは、82年高校卒業後に全開連畜産技術センターで研修を受け就農。当時の飼養頭数は18頭だったが、90年に牛舎を増設し規模拡大を図り、現在では搾乳牛42頭、育成牛28頭。

耕種農家連携で自給飼料生産努める

乳肉の6次産業化目指す

1頭当たり平均乳量1万700kg、分娩間隔420日、飼料用稲WCS、スーダン・イタリアンなど草地面積は借地も含み合計約110ha。團藏さんは、特に乾乳時のボディコンディションが重要という。

地域の耕種農家とも連携しながら、自給飼料生産に努め、飼料用稲WCSなどを水田転作作物として栽培・収穫・調製・利用し、生産コスト削減に力を入れるとともに、ほかの農家にも販売している。

弟の哲次さんは、会社に勤めた後、88年に就農。同年から乳用種去勢牛約100頭の肥育を始め、健二さんが酪農、團藏・哲次さんが哺育・肥育部門を経営。

93年頃から、交雑種肥育を始め、しだいに飼養割合は増え、2002年には、乳用種・交雑種が半々

になった。現在、交雑種雌牛を中心に、哺育期の呼吸器病対策などに注意しながら約360頭を肥育。

給与飼料として、配合飼料・地元産稲わら以外に、飼料用稲WCS・SGS(ソフトグレインサイレージ)を給与。また、エコフィードとして、オカラなども給与している。

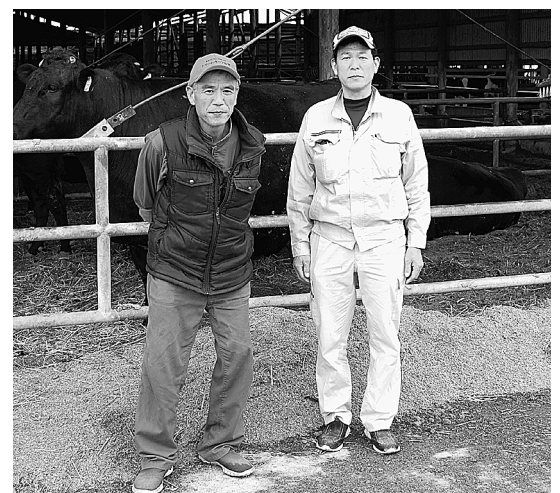
05年には、(一社)日本草地畜産種子協会主催の「第9回全国草地畜産コンクール」で、当時、同県初の「農水省生産局長賞」を受賞した。

08年から、團藏さんが酪農部門、哲次さんが哺育・肥育部門を担当するようになり、現在に至る。

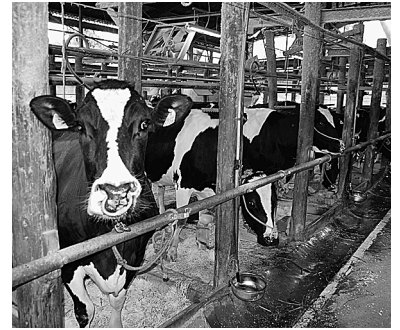
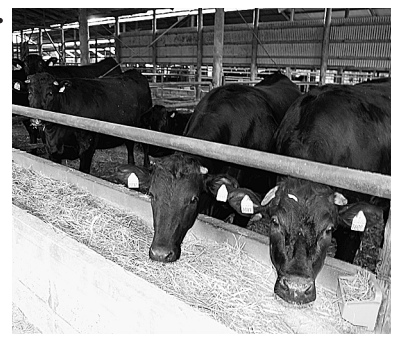
14年6月には、酪農・肥育部門の個人経営は残しつつ、今後の規模拡大や設備投資のほか、WCS等の販売などを目的に株式会社を設立。

團藏さんは、普段から仕事に取り組む中で、自分一人で考えるのではなく、畜産経営を兄弟揃って進められることが良いという。そして、兄弟ともに、子供たちに家業を継いでもらいたいという。

今後は、6次産業化を目指し、ジ



左から團藏・哲次さん 右=肥育舎下=搾乳舎



ェラートなどの乳製品販売のほか、増頭や枝肉重量増加を図りながら牛肉販売も始めたいという。

千葉県畜産総合研究センター

交雑去勢配合2割粉SGSで置換 飼料費減で収益性約3割向上

千葉県畜産総合研究センターは、以前、粉ソフトグレインサイレージ(以下、粉SGS)に着目し、黒毛和種去勢牛の配合飼料の40%を粉SGSに置き換える給与試験を実施し、配合飼料と同等の成績を得られる可能性を報告した。今回、同センターは、千葉県内の肥育牛の過半数を占める交雑種去勢牛への給与試験を行った。

試験は、交雑種去勢牛12頭(種雄牛:福白清)を使い、粉SGSを市販配合飼料(TDN72.0%以上、CP12.5%以上)中に原物重量比で20%を置き換える「20%SGS区」、40%を置き換える「40%SGS区」、配合飼料のみを給与する「対照区」の3区(各4頭)を設けて行った。粗飼料は切断稲わらを用いたが、粉SGSに由来するモミガラも粗飼料と考え、粗濃比を調整した。なお、粉SGSで置き換えたことによる粗たん白質含量の低下を補正せずに給与した。

また、肥育中期にはビタミンA制御を行い、肥育後期には血中ビタミンA水準の維持のため、ADE製剤を4回、

それぞれ50万IUを経口投与した。

調査項目は、飼料摂取量、体重・体尺測定、血液性状、第一胃内容液性状、枝肉格付成績、肉質分析、と畜時の内臓所見とした。

試験の結果、飼料摂取量では、前期は各区でほぼ同等だったが、中期のうち14.0~17.8ヵ月齢では、「40%SGS区」が「対照区」および「20%SGS区」に比べ、有意に高くなった(表1)。17.9~19.9ヵ月齢では、有意差はなく、後期は各区ともほぼ同等だった。また、TDN摂取量も飼料摂取量と同様に推移した。

発育成績では、試験終了時体重はほぼ同等だった。日増体量は、全期間を通して、各区に有意差はなかった。

血液性状では、各区に有意差は認められなかったが、血中尿素窒素(BUN)は、肥育中期以降に「SGS給与区」が対照区と比べ低い傾向だった。血中レチノール量(ビタミンA)は、各区で有意差はなかった。

第一胃内容液性状では、pHは、全期間を通して各区に有意差はなかった

が、「40%SGS区」でpH6.2を下回る個体がみられたことから、粉SGS由来デンプンの分解性が高いことが示唆された。プロピオン酸は、全期間を通して、各区に有意差はなかったが、肥育後期は、「40%SGS区」で高くなる傾向がみられた。

枝肉格付成績では、枝肉重量および胸最長筋(ロース芯)面積は、「20%SGS区」が「対照区」および「40%SGS区」に比べてやや大きくなったが、「20%SGS区」で面積の大きな個体が1頭いたためである(表2)。また、脂肪交雑は、「40%SGS区」でやや低かったが、有意差はみられなかった。枝肉単価と枝肉販売金額は、各区ともほぼ同等であった。

肉色は、「対照区」が「20%SGS区」と比較し、有意に赤味(赤色度)が強いことが示された。そのほか、ドリップロス、粗たん白質含量、脂肪の

表1 飼料摂取量

月齢	乾物摂取量(kg/日)				TDN摂取量(kg/日)			
	対照区	20%SGS区	40%SGS区	P値	対照区	20%SGS区	40%SGS区	P値
前期 11.0-13.9	9.3	8.8	8.9	0.67	7.4	7.0	7.0	0.62
中期 14.0-17.8	9.5 ^A	10.0 ^A	10.6 ^B	0.004	7.5 ^A	7.9 ^A	8.2 ^B	0.01
後期 17.9-19.9	8.9	9.2	9.9	0.36	7.1	7.3	7.8	0.41
後期 20.0-25.9	9.1	9.4	9.4	0.74	7.3	7.4	7.4	0.88

※異符合間に有意差あり(P<0.01)

表2 枝肉成績

格付		枝肉成績			P値
		対照区	20%SGS区	40%SGS区	
枝肉重量 ※1	kg	247.0	251.8	244.3	0.79
	cm ²	50.0	56.0	50.5	0.21
ロース芯面積	cm	7.7	7.7	7.5	0.83
	cm	2.8	2.6	2.6	0.72
皮下脂肪厚	cm	70.4	71.2	70.5	0.27
	歩留基準値	4.5	4.5	3.8	0.29
BMS No.		3.0	3.0	3.0	1.00
		1,442	1,463	1,424	0.51
枝肉単価	円	712,348	736,766	695,766	0.56
	円				

※1 枝肉重量は、半丸の重量

※2 販売価格は半丸価格の2倍

融点に有意差はみられなかった。

各区の肝疾患は1頭ずつで、粉SGS給与による消化器系への悪影響はないことが示された。

粉SGS30円/kg、配合飼料55円/kgとして試算すると、飼料費は、「対照区」に比べ、SGS給与2区で低減がみられた。飼料費と枝肉販売金額の差は、試験区間で有意差はなかったものの、収益性で「20%SGS区」が「対照区」に比べ約3割向上した。

籾米は粗たんパク含量やビタミンAの原料となるβカロテン含量、カルシウム含量が低いいため、これらの不足を理解し給与することが必要である。

畜産物需給見通し

牛枝肉

焼き材・和牛代替需要で乳・交雑種もちあいか

2月は、不需要期だったことから、鍋物需要などがあまり振るわず、全品種で相場は前月に比べ下げた。

今後は、長期にわたる高値の影響により、継続して荷動きは鈍いと考えられる。だが、歓送迎会や花見需要により、しだいに焼き材の需要増が見込まれることなどから、乳用種および交雑種を中心に、相場はもちあいと予想される。

【乳去勢】2月の大阪市場乳去勢牛税込み平均枝肉単価は、B2が1096円(前年同月比106%)となった。前月に比べ、86円下げた(B3は上場なし)。

農畜産業振興機構は、3月の乳用種牛(雌含む)の全国出荷頭数を3万2500頭(同98%)と見込んでいる。輸入量は、3万4700t(同99%)、うち冷蔵品1万6500t(同96%)、冷凍品1万8200t(同101%)と予測している。

依然として、高値は続いているが、これからは、モモやバラなどの焼き材需要がしだいに活発になると見込まれることなどから、相場はもちあいと予想される。

【F1去勢】2月の東京市場F1去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1597円(前年同月比105%)、B2は1397円(同97%)となった。前月に比べ、それぞれ65円、87円下げた。

同機構は、3月の全国出荷頭数を1万9500頭(同101%)と予測している。

出荷頭数が例年並みと予測されているものの、依然として高値が続く和牛に比べ、値ごろ感から代替需要が見込まれることなどから、2、3等級ともに、相場はもちあいと予想される。

【和去勢】2月の東京市場和去勢牛税込み平均枝肉単価は、A4が2622円(前年同月比117%)、A3は2474円(同117%)となった。前月に比べ、それぞれ6円、14円下げた。

同機構は、3月の全国出荷頭数を3万7900頭(同99%)と予測。また、全品種合計の出荷頭数は、前月に比べて約3000頭増の9万1400頭(同99%)と予測している。

和牛は、出荷頭数が例年並みと予測されていることに加え、気温上昇にともなって、鍋物需要の減少などが見込まれることから、3、4等級ともに、相場は弱もちあいと予想される。

向こう1ヵ月の大阪市場の乳去勢B2の税込み平均枝肉単価は、1050~1100円、東京市場の税込み平均枝肉単価は、F1去勢B3が1550~1650円、B2は1350~1450円、和去勢A4が2500~2600円、A3は2350~2450円での展開か。

2月の子牛取引状況

(単位:頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	13	646	239	291	131,843	251,031	552	863
	F1去	1,249	1,111	314	314	438,657	461,523	1,397	1,470
	和去	1,542	1,419	307	308	820,102	791,743	2,671	2,571
東北	乳去	-	2	-	160	-	104,220	-	651
	F1去	-	14	-	272	-	334,877	-	1,232
	和去	1,488	2,192	305	301	786,632	761,624	2,575	2,530
関東	乳去	25	17	233	247	156,470	157,362	672	637
	F1去	161	195	301	302	416,792	427,635	1,383	1,414
	和去	897	721	272	265	759,941	725,242	2,789	2,737
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F1去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	-	-	-	-	-	-	-	-
東海	乳去	21	30	299	302	256,937	251,964	859	834
	F1去	71	77	298	297	433,551	439,138	1,454	1,479
	和去	258	449	256	260	816,073	784,847	3,182	3,014
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F1去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	271	499	259	251	943,656	882,234	3,643	3,508
中四国	乳去	83	96	264	260	215,440	215,404	815	829
	F1去	229	219	287	292	426,760	438,850	1,489	1,505
	和去	250	821	280	231	745,135	742,278	2,663	3,207
九州・沖縄	乳去	33	20	278	279	221,367	218,538	797	784
	F1去	500	372	296	289	438,479	436,325	1,481	1,511
	和去	6,030	10,438	284	280	799,918	784,312	2,820	2,801
全国	乳去	175	811	265	286	206,903	243,721	781	852
	F1去	2,210	1,988	306	305	435,627	449,227	1,424	1,473
	和去	10,736	16,539	288	283	800,376	780,250	2,779	2,757

注: (独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

和牛2・3等級→交雑上物にシフト傾向

国産牛肉の肉質向上が必要

2月は、閑散期ということもあり、相場全体が軟調に推移した。今月は、前年と比較すると、月当たり交雑種が約100頭増加した一方、和牛・乳牛が減少している。これからは、イベントが多くなることから、しだいに牛肉需要が高くなり、相場の底上げが予想される。

市場関係者の話によると、近隣の南大阪食肉市場の閉鎖により、購買者は大阪市食肉市場へ流入してきているが、競り落とす購買者はほぼ決まっている。決算時期が近づいているためか、あるいは他市場で買い揃えているためか、大手購買者の買い

控えが目立ち、3月に入っても想定よりも相場が上がらない。

また、前月と同様に、一部の和牛購買者は和牛の2・3等級の代替として、交雑種の3等級の上物および4等級にシフトする傾向にあり、依然として交雑種の上物の単価は高い。だが、2等級とくにスソ物で皮下脂肪や筋間脂肪が厚い枝肉は、単価の伸びが著しく弱くなり、購買者の目がより一層厳しくなっている。

最近、神戸市内にあるステーキ店では、米国産牛肉を使用した低価格のローストビーフ丼が人気を博している。今後、外国産との差別化を図るため、国産牛肉のより一層の肉質向上が必要である。

(全開連西日本支所神戸事業所 北田学史)



豚枝肉

焼き材需要と輸入冷蔵品減で相場はもちあいか

2月の東京市場税込み平均枝肉単価は、上物が521円(前年同月比83%)、中物は488円(同82%)となった。相場安だった前月に比べそれぞれ55円、63円上げた。上旬は、特売需要や鍋物需要で上物価格500円台後半と堅調な相場だったが、中旬以降は需要が鈍り、下旬は同400円台前半と変動が大きかった。

農水省食肉鶏卵課は、3月の全国出荷頭数を141万3000頭(前年同月比103%)、4月は137万3000頭(同100%)と予測している。

農畜産業振興機構は、3月の輸入量を6万4300t(前年同月比98%)と予測。うち、冷蔵品は前年同月をかなり下回る2万6800t(同93%)、冷凍品はやや上回る3万7500t(同103%)と見込んでいる。

暖かくなり鍋物需要が減少するが、焼き材需要の手当てが出始める。また、入学や就職などで家計の出費が増え、節約志向が強まり、牛肉から低価格の豚肉へ需要がシフトすると思われる。輸入冷蔵品の減少が予測されていることから、相場はもちあいで推移か。

向こう1ヵ月の東京市場税込み平均枝肉単価は、上物が490~520円、中物は450~480円での展開か。



恒常的な素牛不足により相場の高値基調続くか

【乳素牛】2月の素牛価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、乳去勢が20万6903円(前年同月比134%)、F1去勢が43万5627円(同116%)となった。前月に比べ乳去勢は、3万6818円、F1去勢は1万3600円下げた。前月より価格が低下したものの、依然として素牛不足が続き、高値となった。今後も、素牛不足は解消せず、需給のひっ迫が継続すると見込まれ、両品種とも相場は強含みの展開が予測される。

【スモール】2月の北海道主要市場1頭当たり税込み平均価格は、乳雄が11万7742円(前年同月比240%)、F1雄が26万7127円(同160%)となった。前月に比べ乳雄は3662円、F1雄は7981円上げた。取引頭数は、乳雄、F1雄とも

に前月に比べ減少しており、それぞれ前月比96%、99%となった。前年同月比では108%、109%。両品種とも前月に比べ取引頭数が減少し、相場は高値基調が続いた。

スモールの需要が強い中、出荷頭数が引き続き減少することが見込まれ、需給がひっ迫し、相場は強含みで推移するか。

【和子牛】2月の和去勢価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、80万376円(前年同月比126%)で、前月に比べ2万126円上げ、6ヵ月連続で過去最高を更新した。

恒常的な素牛不足と堅調な枝肉相場を背景に購買者の買いが活発となり、価格を押し上げた。

今月から来月に導入する素牛は出荷時期が翌年の需要期にあたるため、活発な手当てが見込まれ、高値相場が続くか。